

八六 清水寺に二千度参詣する者、双六にうちいるること「宇治拾遺物語卷六・四」

今は昔、人のもとに宮づかへしてある生侍なまざむらいひ有けり。する事まゝに、清水へ人まねして、千度詣を二たびしたりけり。

其後、いくばくもなくして、主のもとに有ける同じ様なる侍と双六をうちけるが、おほく負けて、わたすべき物なかりけるに、¹いたく責めければ、思わびて「我、持たる物なし。只今たくはへたる物としては、清水に二千度参りたる事のみなんある。それを渡さん」といひければ、かたはらにて聞く人は、謀はかる也とをこに思て笑けるを、此勝たる侍、「いとよき事也。渡さば、得ん」といひて、「いな、かくては請けとらじ。三日して、此よし申て、おのれ渡すよしの文、書きて渡さばこそ、請けとらめ」といひければ、「よき事なり」とちぎりて、其日より精進して三日といひける日」さは、いざ清水へ」といひければ、此の負侍、「此しれ物にあひたる」とをかしく思いて、悦びてつれて参りにけり。いふまゝに文書きて、御前にて師の僧よびて、事のよし申させて、「二千度参りつる事、それがしに双六に打いれつ」と書きてとらせれば、請けとりつゝ悦びて、ふし拝みてまかり出にけり。

そののち、いく程なくして、此負侍、思かけぬ事にて捕へられて、獄むすびに居にけり。とりたる侍は、思かけぬたよりある妻まうけて、いとよく徳つきて、つかさなど成て、楽しくてぞありける。「目に見えぬ物なれど、誠の心をいたして請とりければ、仏、あはれとおぼしめしたりけるなんめり」とぞ人はいひける。

例。 ¹責めるのは当然貸主側、思い詫びる（困る）のは借りのある側なので主語が変わるのを常識で判断する。